

# 日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



## 衆院選 「一強」続く

投票日、寒気に覆われた日本列島。投票率52.66%は戦後最低だった。激しい雪の中、「1票」に思いを託した有権者たちの2015年は――。

2014年12月14日 新潟県湯沢町 撮影：宮間 俊樹（毎日新聞東京本社写真部）

### 今月のことば

「東電福島第一原発は事故原因の解明がなされないまま現場の解体、撤去作業が行われている。日本の原発事故は、このように現場を消してきた」  
 吉岡 斉・原子力市民委員会座長（12・8） 11頁

「飛行機は点と点だけだが、鉄道は点と面とを結び、リニア中央新幹線で、各地域の拠点を結び、中央回路をつくりだす」  
 葛西 敏之・JR東海名誉会長（12・12） 11頁

「与党の勝因について」成果は見えていないが、期待を作り出したことを有権者は評価した」  
 待鳥 聡史・京都大学大学院教授（12・19） 12頁

新たな年が明けました。昨年末の衆院選で与党が定数の3分の2を維持、安倍政権は安定的な政権基盤を確立しました。これを受け、集団的自衛権に絡む法整備、川内原発の再稼働などが動き始めます。今年には戦後70年の節目だけに、外交面でも中国、韓国との関係などにさまざまな動きが出てくる年になりそうです。

70年前、第2次大戦が終結して幕を開けた米ソ両超大国による冷戦体制は、1989年に終わりを告げました。世界は流動化し、人々は民族や宗教によりどころを求め、地域紛争が頻発するようになりました。グローバリズムの流れの一方で、民族、宗教など共通項を設定し、自分以外の価値観を認めない排除の論理が世界を覆っているように見えます。

（2ページに続く）

多様化するメディア  
 信頼できる情報の発信基地に

理事長 伊藤 芳明



ウクライナ危機への対応を語ったマルグヴェラシヴィリ・グルジア大統領の会見。司会を伊藤理事長が担当した。(2014.10.21)

### ネットを介した直接発信 新しいメディア戦略

その中で、シリアやイラクで支配地域を拡大しているイスラム過激派組織「イスラム国」(IS)の存在が、われわれメディアにとって新しいタイプの脅威となる危惧を感じます。これまで少なくとも米人ジャーナリスト2人を含む米英人5人が残忍な方法で殺害され、日本人を含む多数が拘束されているとみられます。

彼らの対メディア戦略は、インターネット社会と無縁ではないように

思えます。メディアの世界でこの70年間の最大の変化に、新聞、雑誌、テレビに加えて、ネット空間が影響力を持つようになったことが挙げられます。ジャーナリストに限られていた情報発信の機能が、簡単に手に入るようになりました。

湾岸戦争(1991年)で、われわれ外国報道陣はバグダッドのアル・ラシッド・ホテルに集められました。ブッシュ米大統領にとってもイラクのフセイン大統領にとっても、自らの主張を世界に向けて発信し、相手側の主張を知るために、外国メディアの存在が必要とされた時代でした。このホテルは空爆しないという暗黙の了解が双方にありました。

戦場でも一定のルールが存在した、マスメディアにとって牧歌的ともいえた時代はすでに過去のものです。映像のプロが関与するメディア戦略部門を持ち、ネット上にISのプロパガンダを拡散させ、若者をリクルートする。相手の主張を認めず、自らの主張だけを一方的に流す。そこにメディアの居場所は限りなく狭くなってきます。人質として捕え、処刑の映像を流し、交渉カードに過ぎなくなっています。

### 真剣勝負の質疑応答 ゲストの本音引き出す

政治家や財界人ら、日々の取材対象としている人々の中にも、ネットを通じて情報発信する人が増えてきました。マスメディアがこれまで果たしてきた、情報を精査し、評価する機能は、邪魔だと感じている人さえいるようです。受け手の側にも、メディアを介さず直接、情報を受け取りたいと望む人が出てきています。

発信者が多様化すればするほど、問われるのは発信される情報の質です。情報が信頼するに足るものか。一方に偏らないバランスのとれた情報か。情報が氾濫する時代にあつて、ジャーナリストに求められるのは、その1点だと思えます。

その中で信頼性の高い多様な議論を提供する場としての日本記者クラブの存在は貴重です。昨年1年間に主催した会見は、過去最高の230回に達しました。専門性の高い企画委員が選ぶゲストは、政治、経済からスポーツ、芸能に至るまで多様な領域のニュース性に富む方ばかりです。何よりもクラブの会見には、鋭い質問の矢を放つことで、ゲストの

一方的な情報発信ではなく、言い足りない本音を引き出す力があります。真剣勝負の質疑応答を、一層進化させていきたいと思えます。

### 筋肉質の体制で 発信機能を充実

作家の赤坂真理さんと明治学院大学の原武史教授の昨年9月の対談でスタートした「戦後70年 語る・問う」のシリーズ企画は、今年も継続して多様な見方を提示していきます。

さらに2年目に入った現役記者対象の「記者ゼミ」は、「ネット時代のマスメディア」をテーマに既に12回開かれ、継続しています。

吉田慎一・前理事長時代から進めてきた当クラブの財政健全化と事務局機能の効率化は着実に成果を挙げ、黒字収支が見通せる筋肉質の体制に変わっています。

戦後70年間を冷静に振り返り、これからを見つめる。今年も、世界に向けて上質な情報を発信する基地機能を充実させていきたいと思っています。

会員の皆様のご支援、ご助力をお願いいたします。  
(毎日新聞社専務取締役、主筆、編集編成担当)

新年にあたって 伊藤芳明理事長 1・2  
 新春随想 4・5  
 デフレ脱却へ“狭い道”——  
 これからは経済記者の出番だ 杉田亮毅  
 神戸・淡路取材団報告 6・7  
 クラブゲスト  
 ガルセッティ・ロサンゼルス市長／平 3  
 井愼二・医師  
 志摩篤・元陸上幕僚長／張本勲・元 8  
 ロ野球選手  
 渡辺靖・慶応大教授／石原慎太郎・次 9  
 世代の党最高顧問  
 コーベリエル・自然エネルギー財団理事 長／田中浩一郎・日本エネルギー経済 研究所中東研究センター長、保坂修司・同 副センター長／内堀雅雄・福島県知事 10  
 本田悦朗・内閣官房参事／吉岡斉・原 子力市民委員会座長／葛西敬之・JR東 海名誉会長 11  
 レメンゲサウ・パラオ大統領／松本 正生・埼玉大教授／待鳥聡史・京都大 大学院教授 12  
 朝鮮通信使ツアー 安尾芳典 13  
 記者ゼミ ネット時代のマスメディア編 13  
 ワーキングプレス 14  
 師走総選挙 日本テレビ 伊佐佐健 15  
 名古屋発 リニア中央新幹線着工 中日新聞社 石井宏樹 15  
 被災地通信 新聞資料館「石巻ニ 16  
 ユーゼ」石巻日日新聞社 武内宏之  
 リレーエッセー 17  
 イスラム圏初の女性首相ブットさん 読売新聞社 林 路郎  
 マイBOOKマイPR 18

## 伝えておきたい現代史 「戦後70年 語る・問う」企画

今年には戦後70年。日本記者クラブが昨年9月から始めたシリーズ「戦後70年 語る・問う」は昨年末までに9回行った。今年も大事な企画として、さまざまなゲストを招きたい。

幕開けは社会学者の見田宗介さんと大澤真幸さんの対談(1・6)だ。

どのゲストも、念入りに準備して、クラブに来てくださる。戦後70年は重いテーマだが、伝えておきたいそれぞれの物語を語る。ヒストリーとストーリーが重なる貴重な場だ。

●「戦後70年」ゲスト(14年12月まで)  
 ①赤坂真理(作家)・原武史(明治学院大教授)②保阪正康(作家)③加藤典洋(評論家)④高木勇樹(元農林水産事務次官)⑤山田太一(脚本家)

⑥小峰隆夫(元経済企画庁調査局長)⑦志摩篤(元陸上幕僚長)⑧張本勲(元プロ野球選手)⑨渡辺靖(慶応大教授) 敬称略

### 欧州3国にエネルギー取材団

取材するため、2月2日から12日までスウェーデン、アイスランド、ドイツの3カ国に海外取材団を派遣する。高レベル放射性廃棄物の最終処分、地熱発電、再生可能エネルギー、原発の過酷事故対策など日本と共通する課題を各国の当事者に取材し、スウェーデンでは運転中の原発を訪ねる。各国大使館の協力で多彩なプログラムが組めた。14社17人が参加予定。取材報告は会報3月号で。(専務理事 中井良則)



### エリック・ガルセッティ ロサンゼルス市長

#### 多様性こそが力の源泉

11・26(水)記者会見/司会:杉田弘毅委員/通訳:澄田美都子/出席:21人/動画

高校時代に日本に留学した親日家市長だ。オバマ大統領の選挙運動幹部を務め米連邦政

治にも精通する。中間選挙で大敗しレームダックと化したオバマ大統領は政策を遂行できるのかと聞くと、「移民やエネルギー政策、環境、インフラなど全米は連邦政府が解決すべき問題がたくさんある」と共和党、民主党の協力を訴えた。

ロサンゼルスは日本人コミュニティやハリウッドなど観光地が多い。激しい人種暴動や犯罪都市として知られていたが、最低賃金を上げ、失業率を下げ、犯罪発生率も1950年代のレベルにまで低下させた。43歳と若い市長は「多様性こそロサンゼルスの力の源泉だ」と語る。不法移民に米国滞在を許容するオバマ大統領の移民政策は、米国内で賛否両論だ。だが、ヒスパニック移民が多数いる市だけに当然支持だった。

企画委員 共同通信編集委員室長

杉田 弘毅

### 平井 愼二

下総精神医療センター薬物依存治療部長

#### 条件反射を利用した新療法

11・28(金)研究会「条件反射制御法と刑法改正」/司会:小栗泉委員/出席:12人/動画

覚せい剤常用、アルコール中毒、ストーカーなど、反社会的な習慣行動を矯正する新療法を提唱した。



治療法の名称は、「条件反射制御法」。例えば覚せい剤常習者の場合、入院させ、特定の身振りと一緒に「私は覚せい剤をやらない」と何度も唱えさせる。習慣化したら、覚せい剤注射を打つまねをして、途中でこの「おまじない」を唱える。これを繰り返すと、覚せい剤使用への連鎖行動が遮断され、中毒から抜け出せるといふ。

「パブロフの条件反射から学んだ。理性に訴えても反射連鎖は止められない。学会で発表し罵声を浴びたこともあるが、この治療を広めたい。常習者には治療を命じるよう刑法改正も必要」と語る。実際に多くの常習者を矯正させ、警察などで導入されている実績が自信を支えている。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

▼「クラブゲスト」は8ページへ続く

# デフレ脱却へ「狭い道」

## これから経済記者の出番だ

杉田 亮毅

(日本経済研究センター  
代表理事・会長)

衆院解散については、自分の政権の長期化を図るため、伝家の宝刀を抜いて総選挙を断行するということでも理解できる。筆者は、昨年夏すぎから早期解散を予想していた。しかし、消費税の2%引き上げの1年半延期の決定をみて、背筋に冷たいものが走るのを禁じ得なかった。

経済学には「個別最適、全体誤謬」という言葉がある。景気という点では正解でも、世界一の国家債務を抱えていることを含めて考えるとどうか。せめて、もう少し景気回復が見込める今年の連休明けまで、決定を延ばす——で、しのいでもらいたかった。

1つの決定は、次の変化を呼び、また次の変化を引き起こすのは、経済も同じ。早速、米国の格付け

会社ムーデイズが、日本の国債の格付けを一格引き下げる決定を発表した。すぐには、それに伴うリアクションは生じてはいないが、中期的な視点では無意味だ。

これからは、経済記者の冷静、緻密な勉強と分析、報道がとても重要になる。親安倍、反安倍ではなく、安倍首相もうなずくような分析が必要だ。

### バブルをめぐる

#### 2つの大失敗

筆者も含め、日本の経済記者は、この20年間で、2つの大失敗をしている。これはメディアだけではなく、エコノミストの大半にも当てはまることだが……。

それは、第1に1980年代に累積したバブル現象を見抜けなかつたこと。

つたこと。

第2に、それを退治しようとする、当時の三重野康日銀総裁をはじめとする金融当局の急激な引き締め政策を緩和できず、その後の長期デフレを許してしまったことだ。

第1のバブルを見逃した最大の原因は、85年の「プラザ合意」に基づく急激な円高を受け入れ、影響緩和のため、財政、金融をジャブジャブに緩めるのを容認してしまったこと。その結果、70年比で、安倍政権発足直前までの40年間に、円レートは4・5倍の上昇。その間、ドイツは全くの横ばい、韓国ウォンは10%の低下。過度の円高放置は、製造業を中心に、国内の産業空洞化を加速し、長期デフレの要因になった。

### 日本の為替政策は

#### 反面教師？

数年前、筆者は中国の政治協商会議の講演に招かれ、経済の専門家たちと経済政策について議論したことがあった。その中で、「中国元の穏やかな切り上げ」を勧める筆者に、次のように反論してきた。

「われわれは、日本の為替政策を反面教師にしている。あれだけ強かった日本の産業の競争力が急速に失われたのは、プラザ合意をあまりにも簡単に受け入れたからではないか。われわれは、日本の失敗を繰り返さないことを肝に銘じている」

中国の専門家たちの批判が全面的に当たっているとは思わない。日本の貿易不均衡を背景に、プラザ合意の必然性は、ある程度認めざるを得ない。

しかし、同時に、円高を国内の構造調整に使うという為替政策に過度の負担を負わせたこと。また、円高対策、中小企業対策のシユプレヒコールに押され、財政、金融両面から、その後のバブル累積の素地をつくってしまったこと。「死んだ子の年を数える」類



すぎた・りょうぎ▼1937年長崎県出身 1961年日本経済新聞入社 ワシントン特派員 東京本社経済部長 編集局長などを経て2003年代表取締役社長 08年代表取締役会長 12年から参与 同年から日本経済研究センター代表理事・会長 1999年から2003年まで日本記者クラブ理事長を務めた

いだが、このことは、いま思い出すと、砂を噛む思いがする。日銀による性急なバブル抑制は、平成の鬼平ともてはやされ、金利の連続上げにも、多くのメディアは拍手を送ってしまった。50年余に及ぶ経済記者OBの実感としては、世の中でもてはやされる経済政策は、多くの場合、のちのち、ろくな結果をもたらさない。

### 財政再建と構造改革

#### 「ナローパス」を渡れるか

いま直面しているのは、こうした大失敗の状況とは、全く逆の局

面だ。安倍首相が言うように、デフレ脱却はまだまだ道半ばで、その継続が必要なことは事実。

しかし、同時に、少し先の話にはなるが、物価上昇から金利の上昇に火がつけば、そのコントロールが難問。いま0.5〜0.6%の国債金利が2〜3%になると、1千兆円余の国債の利払いが急増して、財政、金融は、制御不能に陥る。

日銀はさらに、能力いっぱい国債を買って金利上昇を抑えようとするだろうが、限界を超すと海外からの信認低下を招き、悪い円安になる。悪い円安が始まると、これを止めるのが難しくなる。ハイパーインフレへの道だ。

経済記者にとって、特に重要なのが、国債金利(相場)と、円レートの差。デフレ脱却への道は、千尋の谷を、1メートル幅のつり橋で渡るのに似ている。右には、ハイパーインフレの谷があり、左には、財政崩壊からくる強烈なデフレの谷。日本経済は、そのどちらにもなり得るのだ。

この「ナローパス」を無事渡り切るには、政治家、国民、そして国民の1人としてメディアも、覚悟がいる。消費税を延期した1年

半およびその後も、不測の事態を招かないようにするには、歳出入両面での財政再建への強力な取り組みと、経済の構造改革による成長率の引き上げが必要だ。これを避けては、千尋の谷の向こう岸にたどり着くことはできない。

### 第3の矢の具体化を

#### 試される安倍新政権の覚悟

そして、ほとんどゼロに近いに近づいている、日本の潜在成長力を2〜3%にカサ上げするには、議論だけで頓挫状態になっている、アベノミクス第3の矢のメニューをもう一度マナ板に乗せ、実現していくことが肝要。

構造改革の1丁目1番地は、宙ぶらりんのTPP(環太平洋経済連携協定)交渉をまとめ上げること。完璧な内容でなくても、この包括交渉の合意が、日本の経済界に新たな活力を与え、国内の改革にも促進材料になる。

第3の矢としては、女性の活躍推進、労働改革、農業の競争力強化、法人課税の引き下げと、料理

のメニューは出揃っている。

また、日経センター、大和総研、みずほ総研の3大シンクタンクが提唱している「東京に国際金融センターを」という構想も、日本経済の活性化、成長力カサ上げにつながる。日本の1500兆円の高融資産と、世界から集める資本をもとに、アジアの経済開発に資金を流す役割を果たせば、東京オリンピック後の日本の底力を引き上げることになる。

これをどういう順番で具体的に政策化できるか、総選挙後の政権の能力が試される。デフレ脱却は、金融政策と増税だけでは実現できない。

安倍首相は、総選挙で、圧倒的な与党議席を確保し、強力な政権基盤を築いた。デフレ脱却のための構造改革を思い切って実行できるはず。しかし、同時に、総選挙で、既存抵抗勢力と結びつきの強い議員が数多く当選してきていれば、足を引っ張ってしまう。

日本が財政崩壊とハイパーインフレを回避しながら、デフレ脱却できるか、世界中が注視しているといつてよい。これからは、経済記者の出番なのではないか。

## 神戸・淡路取材団（12月2日～4日）

阪神・淡路大震災（1995・1・17）から20年を前に、取材団を派遣した。11社15人が参加し、神戸と淡路のいまを取材した。

### ●住民本位と「速さ」の両立が課題

「復興とは何だろうか」。神戸の現状に触れ、考えさせられた。

短期間で決まった行政主導の過大な再開は店主を苦しめ、街並みは個性を失った。震災遺構はほとんど残されず、語り部たちが災害の怖さを伝える難しさに直面していた。

取材で感じたのは、被災者同士が話し合い、納得できる「住民本位の復興」の大切さだ。一方で、仮設住宅で暮らす東北の人々がいま求めているのは、事業の加速化。どうしたら両立させられるのか、悩ましい。

震災前から高齢過疎にあえぐ東北



壊滅的な火災から再生した長田区大正筋商店街アーケードの左右にはマンションビルが並ぶ

の20年後は、人口が増えた神戸よりも厳しいかもしれない。だからこそ、教訓をもっと学ばなければならぬ。そんな思いを強くしている。

河北新報報道部 坂井直人

### ●商店街再生の陰で

被災から復旧、復興までを体験した被災者の声が聞きたかった。

「下町にコンクリートの塊は要らない」。壊滅から見事に再生したかに見える大正筋商店街（神戸市長田区）だが、伊東正和・振興組合理事長の見方は厳しい。

住商複合ビル6棟で構成する新生商店街は規模拡大によって、固定資産税の増加など経費面での負担が増えた。復興は地元に住む副産物をもたらしたのだ。

「元の長田の文化がなくなった」と嘆く伊東理事長だが、路地裏に「ぼっかけ（コンニャクと牛筋の煮込み）」や「そばめし」の店が生き残り、いままも人気だと教えてくれた。当然、これら神戸の下町グルメを堪能して帰京の途についた。

読売新聞東京本社編集委員 岩本洋二



震災で生き残った食堂を改築した被災地NGO協働センター事務所（兵庫区）

### ●神戸の経験を静岡の防災へ

静岡県の防災関係者には漠然とした不安感を持つ人がいる。地震そのものへの不安ではない。東海地震への防災計画に長年取り組む一方で、大災害の経験がないための不安感。

「生活インフラも人のつながりもすべて壊れた」風化は外部の話で、被災者の悲しみは消えない。今回の取材で、生の声に触れ、事前対策の必要性を再認識した。

地震直後に共助で隣近所を救助した北淡町で、「震災で過疎化に拍車がかかった」という嘆きを聞いた。神戸市内は公営住宅の孤獨死がいまもなくならないという。復興にも防災にも、地域の絆は欠かせない。神戸に学び、不安解消につながる防災報道に努めようと決意を新たにしたい。

静岡新聞社会部 寺田拓馬

【日程】12月2日（火）▼神戸新聞社訪問・ニュースポット見学▼北淡震災記念公園 野島断層保存館見学／語り部 池本啓二さんの話（12月3日（水）▼人と防災未来センター見学▼河田恵昭・同センター長会見▼中村順子・コミュニティ・サポートセンター神戸理事長会見▼五百旗頭真・ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長会見▼語り部 奥秀雄さん、秦詩子さんの話▼村井雅清・被災地NGO協働センター代表会見▼室崎益輝・ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長会見（12月4日（木）▼三ツ星ベルト（株）訪問▼（株）トアセイコー訪問▼三谷陽造・神戸市産業振興財団参事会見▼正木貞良・日本ケミカルシューズ工業組合理事長会見▼大正筋商店街視察、伊東正和・同商店街振興組合理事長会見▼杉本明文・兵庫県防災監会見

【参加者】伊藤正志（毎日新聞）岩本洋二（読売新聞）堀井宏悦（読売新聞）指尾喜伸（読売新聞）村井康典（岩手日報）坂井直人（河北新報）今泉桃佳（福島民友新聞）寺田拓馬（静岡新聞）浜浦徹（北日本新聞）北野昇（徳島新聞）高田未来（愛媛新聞）竹次稔（西日本新聞）安倍七重（中央公論新社）白水忠隆（読売新聞出身）塚田博康（東京新聞出身）

## 阪神・淡路大震災20年

### 経験や教訓伝え続けたい

「被災住民の8割が元の場所に戻れることを望んだが、実際に戻ることができたのは3割足らずだ」

阪神・淡路大震災で約8割が焼失した神戸市長田区御菅西地区でまわりの支援を続けるNPO法人代表は震災20年の現状をそう説明する。

復興土地区画整理事業で広い道路や公園が整備され、町並みはきれいになったが、下町のにぎわいは戻らなかった。住宅の軒数は震災前の約8割だが、店舗数は6割、町工場は3割で、町の姿は変わった。

神戸などの被災地では、傷痕は見えにくくなっているが、復興のひずみ、課題は残った。報道してきた立場として複雑な思いもある。

神戸新聞は震災で本社が倒壊し、新聞発行が危うくなった経験から「被災者の視点」を掲げて震災報道をスタートさせた。住まいやまちづくり、国と自治体の温度差など、直面する課題を取り上げた。同時に「経験を伝え、教訓を生かす」をテーマに、復興の過程で学んだことを広く発信しようと心掛けた。

その1つが公的支援の充実だ。国

は「被災者個人に税金は投入できない」との姿勢だったが、生活基盤回復の支援は必要との被災地からの訴えをキャンペーン的に報道した。市民が声を上げ、自治体や国会議員も動き、被災者生活再建支援法が成立したことは大きな成果といえる。

ほかにも「ボランティア元年」といわれ市民活動が活発化したこと、災害弱者への対応、心のケアなど、震災後に取り組みが進んだ例は多い。今後も伝えるべき経験や教訓はまだまだあると感じる。

最後に神戸でいま、災害ボランティア割引制度の実現を求める声が高まっていることを紹介したい。被災地へ支援に駆けつける人は増えていくが、遠隔地の場合、交通費や宿泊費の重さが活動を阻みかねない。

東日本大震災から3年4カ月間のボランティア数は、阪神・淡路の同じ期間に比べ50万人以上も少ない。ボランティアは自己完結が基本だが、活動を支える環境整備は要る。「支援者を支援する文化」をつくりたい。「災害ボランティア割引制度」を実現する会が署名活動を進めている。後押しをお願いしたい。

神戸新聞論説委員長 桜間裕章

## 復興とは何か

### 「20年後」の答えを探して

阪神・淡路大震災から20年を迎える神戸を歩きながら、2つの問いが頭から離れなかった。1つは「東日本大震災から20年後に東北はどうなっているのか」、もう1つは「復興とは何か」ということだ。

廃虚のようだった神戸の街はすっかりきれいになった。街の傷痕はいつか癒えても、人々の心は容易に癒えないことをこの取材を通してあらためて知った。災害対策において命を守ることの大切さを痛感する。

すでに神戸市民の4割が震災後に生まれた世代だという。記憶の継承が新たな課題になっている。兵庫県庁も神戸新聞も「伝える」ことの大切さを強調した。

兵庫県の杉本明文防災監は「復興が終わったとはとても言えない」と話した。風化を防ぐことは「残された課題」を解決していくために必要なことはもちろん、次なる災害への備えでもある。同じ被災地の新聞として、経験を伝えていく責務の重さを感じる。

2つの震災の間に16年という歳月が流れた。復旧・復興のための法制や施策は着実に進化している。被災



神戸新聞社の報道展示室「ニュースポート」で長沼隆之報道部次長、磯辺康子報道部デスクから説明を受ける

者生活再建支援法やグループ補助金など、阪神・淡路では認められなかった私有財産形成につながる制度も東日本では生まれ、拡充された。

しかし、それだけでは足りない。大切なのは、人が戻って暮らしていくことだ。10年目に震災前の人口を回復した神戸と、震災前から人口流出が止まらない東北の被災地の差を思うと、「20年後」の答えはまだ見つかからない。原発事故に苦しむ福島

の未来はさらに不透明だ。衆院選の公示日にもかかわらず、親身に対応してくださった神戸新聞社に感謝します。

岩手日報論説委員長 村井康典

戦後70年

志摩 篤 元陸上幕僚長

12・3(水)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」⑦/司会：勝股秀通委員 /出席：55人/動画



60年安保 その時自衛隊は

「アンポハンター」が子どもたちの間でも、やはり言葉となった1960年。1期生として防衛大学を卒業した志摩氏は、首都を警備区域に持つ東京・練馬の陸上自衛隊第1連隊に配属された直後に、安保改定阻止闘争に遭遇する。日本を「防共」の砦としたい米国と、日米を分

断しようとする中ソの思惑とのせめぎ合いでもあった闘争は6月、一気にヒートアップする。国会周辺では連日、20万人を超す全学連などのデモ隊が警官隊と衝突。女子大生が命を落とす流血の事態に、政治は自衛隊の活動を視野に入れ始めていた。第1連隊には外出禁止令が出され、いつでも持ち出せるよう小銃などの弾をきちんと仕分けし、機関銃も毛布でくるみトラックの荷台の下

に隠し入れたという。「6月15日ごろだったと思う」と記憶をたどりながら、治安出動の準備命令が下った時のことを振り返った。

「命令の文言は思い出せないが、ただ1つはつきりと覚えていることは、師団幹部が読み上げる命令を聞いているだけで足が震えた」

ブラウン管を通して、激しい闘争を見続けてきた隊員たちの間には、デモ隊に対する怒りの声が渦巻いていた。しかし、治安出動の訓練などやっていたことがない。「警告射撃はどう撃つのか。催涙弾もない。いまでも出動した場面を想像するだけで、背筋がゾッとすると語り、「出動しなかったからこそ、いまの自衛隊がある」と言葉をつないだ。

「国民の支持と覚悟がなければ、自衛隊は動けない」と言い切る。2004年のイラク派遣。犠牲を覚悟して出動できたのは、部隊を送り出す旭川市民の「頑張ってください」という言葉があったからだと言った。その言葉には、国民とともに歩んできたという自負と重みを感じた。追真の証言の連続。衆院選の公示直後で、会見場に若い記者の姿が少なかったことが惜しまれた。

企画委員 読売新聞東京本社調査研究 本部主任研究員 勝股 秀通

張本 勲 元プロ野球選手

12・3(水)同シリーズ企画⑧/司会：宮内正英委員/出席：71人/動画



自分史を重ねて 「球界のご意見番」 アッパレ

東京五輪の64年、私は運動部記者として水原監督率いる東映フライヤーズ(現日本ハム・ファイターズ)を担当、「張本番」をやったことがある。

当時の張本選手は「球界一の暴れん坊」、チーム内でも水原監督以外は先輩を先輩とも思わず、取材するメ

ディアも払いのける態度。23歳の若さで強打の四番打者。「文句あるなら、実力で来い」が、顔に表れた気力。在日韓国人ゆえの差別、貧困、広島での原爆被爆、姉の死、野球選手にとつて致命的な幼年時の右手大けがによる後遺症など、当時は一切語らず。ただ世の中の不条理に、野球の力で敢然とぶつかっていく気迫のものすごさがあった。

それから50年、昨年11月26日発表

の日本野球機構80周年ベストナインに王、長嶋氏らとともに選ばれた。2752試合、3085安打、504本塁打、生涯打率・319という実績。「栄光の功労者」、アッパレ「球界のご意見番」になった。

会見では、浪商から東映入団の真相、実兄がタクシীর運転手をしながら乏しい収入から学費を捻出した兄弟愛、契約金2百万円のうち百万円で広島に家を買った最愛の母に捧げたこと、東映時代の対南海戦で愛人が観戦している前で途中交代され、クラブを投げ捨て合宿に帰り、一、二階のガラスをたたき割ったこと、王選手と銀座の女性を張りあつたこと、プロ野球選手の強敵は「酒、バクチ、女」、それでつぶれた有望若手投手、最高の投手は左の金田、江夏、右の杉浦、尾崎、野村捕手のささやき戦術に空振りのバットで反撃したことなど生の球界裏話。

一方、原爆体験から強く戦争反対を語り、「政治のことはわからないが」と言いながら、朴韓国大統領の度重なる対日批判、慰安婦問題を表に出すことへの疑問など日韓関係の現状を深く憂う発言。軽妙ながらも淡々とした語り口に会場は何度もなすすぎ何度も沸いた。

中日新聞相談役 大林 圭一



**渡辺 靖** わたなべ やすし  
慶応大学教授

12・12(金)同シリーズ企画⑨/司会：会  
田弘継企画委員長/出席：76人/動画/  
会見詳録

日本国内では今年迎える「戦後70年」に向け、次世代へ記憶を継承する作業が始まっている。一方で、米国にとって、この70年はどういう意味を持つのだろうか。米国は第2次世界大戦後、ベトナム戦争、東西冷戦、湾岸戦争、アフガニスタン戦争、そしてイラク戦争と、さまざまな戦争



**アメリカにとっての「戦後」とは何か**

を経験し「複数の戦後」がある。「テロとの戦い」でいまも「戦中」にあり、当然日本とは温度差がある。とは言っても、第2次世界大戦は現代の米国を考えるうえで重要な起点となっている。渡辺さんはその思想的な源流を「黄金の1950年代」に求める。特徴は白人主流の「古き良きアメリカ」、「反共・自由主義圏の盟主」としての「超大国」の確立などだ。その反動として60年代に公

民権運動や保守主義が芽生えた。70年代には「50年代へのノスタルジア」として宗教右派や新自由主義、新保守主義が出現した。

そしていま、超格差社会の誕生、党派政治への不信、世界の多極化を迎え「50年代に回帰するのか、そのバージョンアップを求めるのか」、米国は岐路に立っているという。

米国に「日本の戦後」がどう見えるのか、米国側の視点も紹介した。冷戦期に左派を警戒した米国はいま、逆に存在感を増す右派を警戒している。理由は2つ。現在の右派の言説は、米国が構築した戦後世界秩序を否定しかねない。また、靖国問題などに見る歴史認識問題が中国を利することになるという危機感だ。

渡辺さんは、戦後70年の節目となる2015年に安倍首相が訪米する際は「日本の首相として初めての米議会演説を実現してほしい」と熱く語った。実現の前提条件は、慰安婦問題の「河野談話」の継承や日韓関係改善の意思を明確にすることなどだろうと予測する。

米政治、社会を深くウオッチしている研究者ならではの冷静な助言と受け止めたい。

毎日新聞・アジア調査会 吉田 弘之

**石原 慎太郎** いしはら しんたろう

次世代の党最高顧問  
12・16(火)記者会見/司会：倉重篤郎委  
員/出席：151人/動画

前日、次世代の党からの会見申し込みを受け、緊急セットされたにもかかわらず、151人も集まった。46年前、参院全国区に初当選して以来、日本政界の最右翼で過激な発言を続けてきた石原氏。最後に何を言い残すか注目の的だった。



**政治活動46年に幕「死ぬまで人から憎まれていたい」**

冒頭、石原氏は今回の総選挙で落選したことについて、解散時に引退するつもりだったが若い同志から応援を頼まれ、あえて比例代表名簿最下位で出たと釈明した。落選という幕引きが石原氏の自尊心を傷つけるのだろう。石原家は甲州武田武士の末裔であり、「いささか恥ずかしい落選」という形の討ち死にをすること「宿命」と微妙な心境を語った。

これだけ言った後は、意外なほど淡々とした感想になった。「歴史の十字路に自分の身をさらして立つことができたのもうれしい経験だ。いま晴れ晴れとした気持ちで去れる」

自身を「専業政治家」というより「政治に参与した物書き」と規定していた。「心残り」と司会者に聞かれて、「憲法の一文字も変えられなかったこと」と答えたが、その理由も「物書き」らしく「前文の醜さ、助詞の使い方の誤り」だった。

だが、現実政治の分析は明快だった。「格差が開き、20歳〜30歳代に希望がない。漠とした不満のリアクションが今回選挙の共産党の躍進だ。株価が上がったから経済がよくなったと判断できない」

中国人記者が尖閣諸島購入などで質問を浴びせると、「シナは……」と挑発的な対応をしたが、かつて青嵐会で日中航空協定締結に反対していた頃、周恩来首相(当時)が訪中した財界人に「青嵐とは美しい言葉だ」と評価したというエピソードを挙げた時は、「シナ語で」と言っただけで「中国語で」と言い直していた。会見の最後の言葉は「死ぬまで人から憎まれていたい」だった。

毎日新聞出身 金子 秀敏

トーマス・コーベリエル 自然エネルギー財団理事長

再生可能エネルギー産業で  
「エネルギーリッチ」な日本へ

12・2(火)記者会見/司会：石川洋企画担当部長/通訳：長井鞠子/出席：21人/動画

スウェーデンのエネルギー庁長官の職を辞して日本の自然エネルギー財団の理事長に就任してから3年余。3度目となる今回の会見は「欧州のエネルギー事情」がテーマだった。



ドイツ、デンマーク、スウェーデンなどの多くの国で再生可能エネルギーによる発電量が急増し、原子力のそれを大きく上回りつつある。規模の拡大に伴って、発電コストは急速に安くなっているという「産業の学習曲線」のグラフを示し、「風力発電などは原発はおろか既存の火力発電と補助金なしで競争できるレベルになった」と指摘した。

東京電力福島第一原発事故直後から、日本のエネルギー政策を見つめてきただけに、当然ながら話は欧州だけにとどまらない。ドイツの電力業界が「1990年代には、再生可能エネルギーが全電力に占める比率は4%が限界だとしていたが、いまやその比率は25%、太陽光だけで5%になる」との事実を紹介。発電会社と送電会社を完全に分離することの重要性を語った。「日本は資源小国だとの長い間の思いから脱し、再生可能エネルギー産業を興せば『エネルギーリッチ』な国になれる」と結んだ会見の内容は、いつもながら明快だった。

共同通信編集委員 井田 徹治

田中浩一郎 日本エネルギー経済研究所中東研究センター長

「イスラム国」の脅威  
旬のテーマで濃密なレク

12・4(木)研究会「イスラム国」をめぐる諸問題/司会：脇祐三委員/出席：64人/動画/会見詳録



過激派「イスラム国」はどのような集団で、なぜ勢いづいたのか。その脅威に国際社会はどう対応すべきか。日本でも関心の高いテーマについて、保坂氏(写真左)はイスラム過激派の系譜とイデオロギーを中心に説明し、田中氏は中東をめぐる国際関係を整理して問題点を提示した。

米国という遠い敵をターゲットにしたアルカイダと違って、「イスラム国」はイラクやシリアで彼らが背教者と断じる他の宗派や勢力を倒そうとするローカル性もある。保坂氏は「イスラム国」の特徴をそう説いたうえで、「古典的なイスラム法を表面上は踏襲しているので、既存の宗教権威が批判しづらい面もある」と指摘した。

シリア内戦には冷戦を続けるサウジアラビアとイランの「代理戦争」の要素がある。そう指摘する田中氏は、「イスラム国」の脅威を抑えるには、「イランも含めた協議の枠組みを設けて、シリア内戦に現実的、包括的に対応する必要がある」と強調した。

多くの出席者が1時間半の間、熱心にメモを取っていた。現役の中東担当記者にも有益な、密度の高いレクチャーだった。

企画委員 日本経済新聞コラムニスト 脇 祐三

内堀 雅雄 福島県知事

再生に向けて 新知事の発信力に期待

12・5(金)記者会見/司会：星浩委員/出席：38人/動画



パワーポイントを巧みに使って、立て板に水の語り口。福島県の新しい知事になった内堀雅雄氏は、地震、津波、原発事故という試練を乗り越えて「穏やかで暮らしやすかった時代を何としても取り戻したい」と力説した。

長野県出身で自治省(現・総務省)から2001年に福島県へ。部長や副知事として13年間、福島県の行政を担当。「50年の人生で一番長く暮らしているのが福島。第二ではなく、第一のふるさとです」と話す。県内の市町村長からも信頼され、10月の知事選でも、多くの政党が相乗り。超党派で難局に向き合う体制はできた。

原発事故の直後、校庭の除染問題で国に相談したら、文科省、経産省とたらい回しにされたといった経験談も披露。12万人の避難者の帰宅問題、中間貯蔵施設の課題、農業や観光の振興など具体的に説明してくれた。「これからは知事として、先頭に立って発信していきたい」と話した。

福島県は再生に向けて発進力のあるリーダーを選んだと思う。残念なのは会見の出席者が38人とどまっていたこと。総選挙のさなかとはいえず、東日本大震災と原発事故への関心が風化しないこと祈るのみである。

企画委員 朝日新聞特別編集委員 星 浩



**本田 悦朗** 内閣官房参与・静岡県立大学教授

**TINA (ティナ) の決意**

12・5(金)研究会「10%先送りが問うもの」② / 司会・実哲也  
委員 / 出席: 42人 / 動画



「こんな時に利上げすれば、日本は奈落の底に落ちるぞ」  
2000年8月、速水優日銀総裁(当時)がゼロ金利を解除した時、本田氏はニューヨーク連銀のエコノミストから、そう警告された。大蔵省(現財務省)派遣のニューヨーク勤務時代のことだ。

ショックを受け勉強してみると、確かに「デフレは資本主義にとって死に至る病」である。帰国後、デフレ克服の重要性を説いて回ったが、その時、図らずも同じ危機感を抱く政治家がいた。安倍晋三氏である。デフレ克服を目指すアベノミクスは、そんな2人の関係から生まれた。

今回の消費増税の延期においても、本田氏は首相の決断に大きな影響を及ぼした。与党の勉強会などで増税反対の論陣を張り、「会議の雰囲気を買った。政策運営を本来のアベノミクスに戻し、全力を投入するほかない。首相にそう進言し続けた本田氏は、自民党の選挙スローガンに自分の言葉を見いだして驚いた。「この道しかない」

英語でいえば、「There is no alternative. 頭文字をとって「TINA(ティナ)」。そう、サッチャー元英首相の決めセリフである。

日本経済新聞編集委員 滝田 洋一

**吉岡 斉** 原子力市民委員会座長・九州大学教授

**エネルギー基本計画の矛盾突く**

12・8(月)記者会見 / 司会: 服部尚委員 / 出席: 53人 / 動画

政策提言する市民シンクタンクである「原子力市民委員会」の座長に昨年9月に就任した。全国48基の原発のうち、再稼働するのはせいぜい3分の1から4分の1との見通しを示した。原発の代わりに使う火力発電の燃料費輸入が経済的に打撃だという見方に対し、燃料費の輸入は減らないと反論した。



原発即時ゼロという前提ではなく、あえて再稼働の見通しを示すのは、時期は別にして原発をなくすという考え方が共に考えていこうという委員会の姿勢でもあるという。

一方で現行のエネルギー基本計画では、できる限り原発依存度を減らすとしながらも、重要なベースロード電源と位置づけた。「ただし、エネルギーミックス(原発比率)目標と個々の事業の具体的タイムテーブルは示されず、先送りされた」と指摘する。現行の計画は現時点で動いている原子炉は1つもないという実態とかけ離れたものになっている。吉岡氏はその矛盾点を突き続けた。多くの国民が原発再稼働に抵抗感を抱く中、政府は世論を気にして積極策に出られないとの見方から、エネルギー政策の議論も「牛歩を強いられる」と断じた。

企画委員 朝日新聞編集委員 服部 尚

**葛西 敬之** JR東海名誉会長

**東海道新幹線半世紀  
リニア着工で新たな出発**

12・12(金)昼食会 / 司会: 杉尾秀哉委員 軽部謙介委員 / 出席: 79人 / 動画

日本の鉄道の歴史で2014年は2つの大きな節目が刻まれた年として記憶に残るだろう。1つは東海道新幹線の開業から50年、もう1つはリニア中央新幹線の着工認可である。いずれもJR東海に関わるものである。葛西敬之名誉会長の会見は、日本が世界に誇る高速鉄道の半世紀の実績と、未来への新たな出発を強く印象付けた。



葛西氏は新幹線開業の1年前の1963年に旧国鉄に入社。新幹線と共に歩んだ鉄道マン人生といえるが、実は国鉄時代の新幹線は技術的な進歩は乏しく、87年の分割民営化以降に飛躍的に発展を遂げたという指摘は興味深い。最高速度を220キロから270キロに引き上げ、車両運用の効率化で列車本数も1時間当たり10本から15本に増やした。高速鉄道としての技術と効率性は最高域に達したといえる。さらに、事故による乗客の死傷ゼロの記録はいまも続く金字塔である。

そしてリニア。東京・名古屋間でも総工費5兆円を超える壮大なプロジェクトだが、全額自社負担で建設する。葛西氏は「新幹線より700円高い料金をもらえば十分やっていける」と自信を示す。米国展開も含め新たな挑戦への気迫を感じた。

読売新聞調査研究本部主任研究員 中村 宏之

トミー・レメンゲサウ パラオ大統領

「春の両陛下のご訪問を  
お待ちしております」

12・18(木)昼食会/司会：会田弘継企画委員長/通訳：池田  
薫/出席：77人/動画



「次回(の来日)は、冬だけはやめようと思ってる」。会見の冒頭に、こう発言して笑いを誘った。日本の約3000キロ南に位置し、赤道に近いパラオ共

和国は、年平均気温が27度の海洋性熱帯気候の国。会見があった12月18日の東京の最高気温は8・3度だったのだから、閉口するのも無理もない。来日の主目的は、戦後70年の今年春に天皇、皇后両陛下をパラオに正式に招待することだった。大統領は17日に皇居・御所で天皇陛下と会見してそのことを伝えた。パラオのペリリュー島は、太平洋戦争の激戦地で、約1万人の日本人が戦死した。大統領は「両陛下のご訪問は光栄であり、国民あげて歓迎する。ご訪問は過去に対して敬意を表することにもなる」と述べた。

海洋国家ゆえの悩みも吐露。「乱獲が増えている。フランスの面積に相当する海域を取り締まるポートが、1隻しかない」と明かし、日本の援助を求めた。厳しい表情だったが、早稲田大学院に留学中の長女のこと質問が及ぶと「ご存じなのはうれしい」と柔和な父親の顔になった。

毎日新聞社会部編集委員 真鍋 光之

松本 正生 埼玉大学教授

12・17(水)研究会「衆院選後の日本―民意をどう読むか①」  
司会：川戸恵子委員/出席：82人/動画

待鳥 聡史 京都大学大学院教授

12・19(金)同研究会②/司会：倉重篤郎委員/出席：83人/動画

主要政党の議席数が選挙の前後でさほど変わらず、人々の記憶にあまり残らなそうな衆院選をどう分析するか。当クラブではおなじみのふたりが、今回も興味深い視点を提供してくれた。



埼玉大学の松本教授(上)の話は「衝撃の告白」から始まった。投票したい政党を見いだせず、「白票」を投じたというものだ。後半の質疑部分で、この投票行動を批判する意見も出たが、是非はさておき、これほど今回の選挙の特徴を言い表す話はあるまい。

個別政策ではいろいろ反対はあっても、全体としてみると安倍政権の継続以外の選択肢が見つからない「四分六分感覚」という総括はおおかたの見方と同じだろう。

選挙を一過性のイベントにしないためには衆院解散から投票日までの期間をもっと長くする必要があると訴えた。こちらは「政治空白を長引かせるな」と考える人の方が多数だろうが、選挙期間中も首相が不在なわけではないし、まずは小規模な選挙で実際に試す価値はありそうだ。

世論調査に関しては携帯電話にかけていないこ

「世論調査に各社もっと独自性を」松本氏  
「政権が目指す方向に進むのが民意」待鳥氏



とにばかり目をとらわれているが、固定電話も振り込め詐欺対策で留守電対応が増えてアクセスが難しくなっているなどの新たな状況を指摘した。

信頼性では郵送方式が一番であり、どのやり方に軸足を置くかで報道機関ごとにもっと独自性を出すべきだとの意見は傾聴に値する。

京都大学の待鳥教授(右)は、今回の選挙で与党の小選挙区と比例代表における議席占有率の差は2年前よりも小さくなっており、「小選挙区制という制度に助けられた勝利」という要素は小さくなっている、と語った。同時に、自民党の獲得議席数が減ったことを安倍政権が後退したかのよう

に言うのは論外、との見方を示した。最も強調したのは、政権選択の選挙である衆院選で勝利してできた政権が目指す方向に進むことが民意であり、そうすることで次の衆院選における業績評価もしやすくなるという点だ。

政権が途中で軌道を修正すると、もともとの政策が的外れだったのか、中途半端になったことで効果が出なかったのか、が分からなくなる。参院選や地方選の結果を「直近の民意」と称して政権に方向転換を迫るのは適当ではない。これらの説明は政治の理想論としてその通りであるが、安倍政権の暴走を防ぐのがマスコミの役割とされている人には受け入れられないだろう。

安倍政権は今回の民意の後押しを有効に活用できているのか。次回は政策の遂行度への評価などを聞いてみたい。

日本経済新聞論説委員兼編集委員 大石 格

## プレスツアーに参加して 朝鮮通信使の感動と 友好への思い

静岡市清水区にある清見寺に到着すると、目についたのが寺門に掲げられた懸板。そこには「東海名区」と書かれていた。朝鮮通信使が当時、寺の前に広がる



清見寺に残された扁額を見学する参加者

朝鮮通信使のために造られたという薩埵時に登った。東海道3大難所の1つとされたが、ここから富士山の眺めは絶景だという。一行は富士山に感動したのだろうか。な

駿河湾の景観に感動して揮毫したものという。

江戸時代に12回、朝鮮から外交使節として来日した朝鮮通信使。清見寺には5回訪問しており、国の史跡に指定されている。

清見寺には、朝鮮通信使がかいた書画などが多数残っている。鐘楼には「瓊瑤世界」と書かれた扁額があった。案内してくれた比較文化学者の金岡基さんによると、「瓊」も「瑤」も玉のことで、2つの玉は互いに光を照らし合うとし、友好関係への思いが込められているという。

同市葵区の宝泰寺にも朝鮮通信使が揮毫した書画が保存されていた。境内には、最初の朝鮮通信使から400年を記念して2007年に常夜燈が建立された。

ぜか、そうした記録はないという。

朝鮮通信使を再開した徳川家康が駿府城で亡くなって今年で400年になるのを記念して、静岡県では「家康公四百年祭」が開かれ、朝鮮通信使も取り上げられるという。

また朝鮮通信使の記録を、日韓共同で国連教育科学文化機関(ユネスコ)の記憶遺産に来年にも申請する動きが出ている。

日韓国交正常化から今年で50年。悪化する日韓関係の改善に朝鮮通信使の果たした役割がよみがえってきそうだ。

共同通信客員論説委員 安尾 芳典

2014・12・4(木) 参加者15人

## 出雲 秀一 Twitter Japan パートナーマネージャー



### ビッグデータ時代の インフラに進化した ツイッター

「ツイッターは情報を伝えた人、関心のある人に伝える道具」と出雲さんは言う。たかが140字と言わなれ。写真は4枚まで掲載できるし、動画も添付できる。リンクの先には、無限のネットの世界が広がっている。いまや報道や災害ではなくはならぬ情報インフラに成長した。しかも、日々、進化しているのである。

故などの実例を挙げて説明する。ニュースの端緒を見逃すまいと報道機関はツイッターを見つめ続けている。米国の報道機関のデスク席には信用できるアカウントだけを検索するディスプレイ画面がある。ローカルニュースだけを選別する、あるいは、監視を自動化する試みも始まっている。米国防務省の黒人少年射殺事件で、抗議の波が南部から東部へ、さらに全米に広がっていることなど、ツイッターを可視化した画面も紹介された。やがて、世論の動向、選挙結果の予測も可能になるだろう。2006年の創立以来のデータはすべて蓄積されている。ビッグデータの時代はツイッターの時代でもある。コンテンツの提供に乗り出す気はないか。出雲さんは「データを提供するだけです。うまく使っていたきたい」と言う。ツイッターを使いこなせるか、が既存メディアが生き残る必須の要件であることを確信した。特別企画委員 朝日新聞ジャーナリスト 学校顧問 津山 昭英

アカウントを持つている新聞社がこの3年余りで、36%から60%以上に、放送局では報道番組でのアカウント利用が90%、政府関係では災害や教育、暮らし情報を中心にアカウントやフォロワー数が急速に伸び続けている。警視庁刑事部には「公開捜査」のアカウントまである。世界にはアクティブユーザーが2億8千万人、1日5億ツイートが地球を駆け巡っている。

出雲さんは、情報発信への活用を、昨年5月の姫路沖のタンカー爆発事

11・27(木)「ツイッターの新たな可能性」総選挙、災害報道などでの活用について／司会：津山昭英特別企画委員／出席：22人＋ネット視聴7人

師走総選挙

伊佐治 健 (日本テレビ)

## 選挙特番 史上最短の準備期間だった

「解散カード」が内閣総理大臣1人が持つ伝家の宝刀なら、テレビ局においても「総選挙特別番組」は究極のジョーカー。切り札である。

局内では限られた時間枠を番組プロデューサー同士が日々激しく競い、バラエティ、情報、スポーツなど何十枚もの企画書が出されては却下される繰り返しだ。

ところが、いざ報道局から「選挙特番カード」が切られた瞬間、年末のスペシャル期でも当日の編成は全て変更されCMも仕切り直し。ネットワーク総動員の大型番組枠が作られることになる。自然災害と並ぶ報道機関最大の使命ゆえ、有無を言わさぬ力がある。だから、番組枠を仕切る編成局員は、「選挙」の2文字にとりわけ敏感だ。営業など各部と向き合った精緻な調整が一瞬で破算となるだけに無理もない。

一方、私たち政治部記者も解散の見通しには重い責任を持つ。「選挙あるかも」などと軽々しく言えば、混乱を招く。オオカミ少年になって

もいけないのだ。

「ちよつと話があるので」と編成局幹部を呼び出したのは、女性閣僚ダブル辞任直前の10月中旬だった。解散をにおわせる情報があったからだ。「年内総選挙の可能性がります」と私の言葉に「大義は何ですか?」といぶかる幹部。「消費増税先送りが争点かも」と説明しても、任期を2年も残した衆院選は唐突と受け止められた。翌週「最短12月14日も」踏み込んで警告。いまにして思えば「ビنگゴ!」だが、確定情報でなければ意味はなかった。

テレビ各社には苦い経験がある。7年前、麻生政権が解散を決断したかに見えた時、全社が準備に入ったところが先送りされ、多くのエネルギーが無駄になった。絶対確実でないかぎり、安易に火を入れてはならないとの教訓が残された。

「解散どうですか?」。その後2日に1回は編成局員に声をかけられるが「進展ないねえ」と毎回同じ答え。だが表向きのんきな永田町から、さ

さやきが漏れ聞こえ始めた。「総理が夜中に電話かけてきて何か興奮してるんだ」「党本部の金庫の中身が確認された」と情報は具体性を増す。いよいよ選挙本部招集か。いざ立ち上げたらヒト、モノ、カネ、巨額の予算を動かし、後戻りできなくなる。決断が迫られていた。

### 解散風 暴風へ、局内も動き出す

そんな矢先の10月末、首相官邸を訪れた自民党谷垣幹事長が去り際のぶら下がり「厳しい状況打開のため、いろいろ議論が出てくる」と解散に含みを持たせる発言をした。出稿を即決し、夕方のニュースで速報した。いよいよだ。

地方の赴任地でこれを見た旧知のベテラン新聞記者からは、「解散風



NNN総選挙特番「ZERO×選挙2014」開票速報の画面から (12月14日/筆者提供)

吹かせてますが、牽制球ですか?」とショートメールが入ったので、「年内もあり得ます」と返す。

そして11月、安倍首相が海外に旅立つと同時に解散報道が相次ぎ、茂木選対委員長が「いつあってもいいよう準備している」と発言して流れは決まった。サラサラと永田町のイチョウの枯れ葉を散らしていた解散風は一気に暴風と化す。

ここにきてようやく選挙本部立ち上げの最終決断に至った。多数のパソコンを発注し、特番制作や出口調査の人員確保に一斉に動き出す。

しかしすでに投票日まで1カ月。「史上最短の準備期間です!」と慌てる同僚に複雑な気持ちになる。

(もつと早く決断できなかっただろうか…)

だがそれは難しい。いくら情報があっても最後のひと押しができない。かぎり、特番のスタートは切れない。そのひと押しとは、首相本人の意思を直接確認するか、あるいは首相自身でも解散の流れを止められなくなつたと見極めることができるかどうかしかない。その域に達することができるか、政治部記者の模索は続く。

いさじ・けん▼1989年入社 報道局長  
会部 政治部 ロンドン支局 ニースセンターCPを経て 2014年から政治部長

# リニア中央新幹線着工 “夢の計画”が現実に 工事がもたらす影響を注視

石井 宏樹  
(中日新聞名古屋本社経済部)



東海道新幹線が開業50周年を迎えた昨年10月、鉄道史に残るもう一つの節目が訪れた。東京―名古屋間の40分で結ぶリニア中央新幹線の着工が国交省から認可された。12月17日には起工式が催され、この会報が届く頃には品川、名古屋駅の準備工事が始まっているはずだ。



2027年の開業に向けて走行試験を重ねるJR東海の山梨リニア実験線 (2013年8月/筆者撮影)

わる」と語る。

## ■リニアを契機に変わる名古屋

昨年9月に山梨リニア実験線で、営業車両の原型「L0系」に試乗した。わずか2分で時速500キロに到達。揺れもなく、車内は普通に歩けるし、座り心地も悪くない。風切り音が新幹線より大きいほか、上り下りが多いため、気圧の関係か耳が少し痛くなった。それ以外はあつけないほど普通で、逆にそれほど完成度が高まっているとも言える。

名古屋駅(名駅)の周辺はリニア開業に合わせた再開発に沸いている。JR東海、三菱地所、日本郵便の高層ビルが建設中で駅前の景観は一変する。名古屋鉄道も「名駅を変える最後のチャンス」と、中部国際

空港行き電車の専用ホームを含めた大規模な再開発を検討する。

JRや私鉄が入り乱れる名駅は複雑な構造から「迷駅」と評判が悪い。国や名古屋市もそこを気にしている。市主導で乗り換え用の広場を設けるなどの構想をまとめ、鉄道各社と協議を進める。地元住民からは「リニアを契機に街が変わる」と期待する声が多い。

## ■工事への不安は根強い

リニアはこれまで「夢の乗り物」とされてきたが、着工で用地買収や大規模な土木工事に入る。JR東海は認可を受けて沿線で事業説明会を開催。「土を搬出するトラックはどのくらい通るのか」「家の下を通るが騒音は大丈夫なのか」「残土の処理はどうする」。沿線住民の切実な問い掛けが相次ぎ、終了予定時刻を大幅に過ぎた会場も多かった。工事に対する地元の根強い不安を感じた。

説明会は51市町村で開かれ、計9100人が参加。参加者からは「初めから計画ありきだ」との批判も漏れたが、JR東海は「丁寧の説明していく」と、小規模な説明会を重ねる理解を得られるかがスムーズな工事のための課題となる。

リニアは全体の9割がトンネルで、大深度地下や南アルプスを貫かねばならない。これまでの整備新幹線では、山岳部の出水や岩盤崩落で開業が延期され、工費が膨らんできた。

JR東海の山田佳臣会長は過去、「掘ってみなければ分からない」と発言。東京―名古屋間の開業は12年後だが、同社幹部も「決して余裕があるスケジュールではない」と明かす。

総事業費9兆円のリニア中央新幹線計画はJR東海の命運を握っており、開業の遅れは日本の大動脈輸送を担う同社の経営を揺るがしかねない。工事は順調に進むのか。工事が沿線の環境や生活を悪化させないか。リニア計画がもたらす光と影を開業までの12年間、報道機関として注視し続けることが大切だ。

いしい・ひろき▼2005年入社  
年から経済部 現在交通担当

### 一口メモ

- リニア中央新幹線 JR東海が全額自社負担で建設する高速鉄道。マイナス269度で冷却した超電導磁石で約10センチ浮上しながら時速500キロで走行する。品川駅と名古屋駅をターミナル駅とし、神奈川県相模原市、山梨県甲府市、長野県飯田市、岐阜県中津川市に中間駅ができる。2027年に東京―名古屋間を開業し、45年に大阪まで延伸する予定。安倍首相は日米首脳会談で、米国への輸出を働きかけている。

被災地通信④ 石巻市 新聞資料館「石巻ニューゼ」

## 震災を語り継ぎ いまを伝える拠点として

武内 宏之(石巻日日新聞常務取締役)

「あけましておめでとうございます」  
この新年のあいさつが気兼ねなく  
できるようになったのは、昨年のお  
正月だっただろうか。それまで被災  
地では「おめでどう」は禁句とい  
う雰囲気が漂っていた。玄関から一  
歩外に出れば、周りには津波で大切  
な人を亡くした人たちが大勢いるの  
で、無難なあいさつで済ませていた。  
地域のあちこちで「おめでどう」の  
あいさつが飛び交うようになったこ  
とに、被災者の心の復興も少しずつ  
進んでいるのを感じる。

こうした世間の空気を記者時代に



「石巻ニューゼ」はニュースとフランス語で博物館を表わす  
ミュゼの合成語。震災直後に発行した壁新聞や写真、  
石巻の街の足跡を見つめ直す資料が展示されている

感じ取っていただろうか。ペンとメ  
モ帳、カメラを手に、取材相手から  
話を引き出したら「はい、さようなら  
」と帰ってくる。相手の心情など  
二の次、三の次。きちんと市民の心  
の声を聞いていたのか、と振り返る  
ようになったのは、本社を離れ「石  
巻ニューゼ」で仕事をするようにな  
ってからだ。

### 街の復興の陰で 押しやられる心の復興

「石巻ニューゼ」は、石巻日日新  
聞社が2012年11月にオープンさ  
せた新聞資料館。全国各地、世界各  
国から被災地視察に来た人たちに震  
災当時のこと、現在の石巻市のこと  
を伝えるのも、被災地の新聞社の仕  
事であると位置付け開設した。館内

には、震災翌日から発行した手書き  
の壁新聞、記者たちが撮った被災状  
況の写真のほか、大正元年創刊の石  
巻日日新聞が刻んできた石巻市の出  
来事を年表にし、その年代の写真を  
展示している。ここで来館者に展示  
品の説明をするのが、いまの仕事だ。  
このニューゼには全国各地から来  
た人たちの被災地への思い、地元石  
巻市民がぼろりと漏らしていく言葉  
がいっぱい詰まっている。とりわけ  
被災した市民の言葉は私の心に沈殿  
している。その言葉からは復興の進  
捗とは裏腹に、沈んでいく被災者の  
心の内が見えてくる。震災後、時間  
とともに被災者の気持ちも整理整頓  
が付き、前を向くだろうと思ってい  
た自分としては意外だった。なぜだ  
ろうと考え続けてきた。出会う人の  
言葉を積み重ねていくうちに、こう  
思うようになった。

―震災から年月が経ち、被災者は  
十分とはいえないが、何とか生活で  
きるようになり、フットと一息つく  
ことができるようになってきた。一  
方でそれは、さてこれからどうしよ  
うかと考える始める時期でもある。ど  
うしようかと考えても、蓄えてきた  
貯金も震災後の生活費で減り、あら  
ためて土地、家を買うには足りない。  
考えれば考えるほど、気持ちが減入  
ってくる。やっと真つ暗なトンネル  
を抜けたと思つたら、またトンネル  
に入り込んでしまった。そんな被災  
者の姿が浮かんでくる。

特に気になるのは、震災後自分の  
会社、地域の復旧・復興に力を尽く  
してきた人たちから「疲れた」と言  
う言葉が聞かれることだ。もし、こ  
うした地域の復興人がリタイアし  
てしまったら復興はどうなるのか。  
だからと言って、どうすることも  
できないもどかしさ。次々と新しい  
建物が建っていく街の復興とは違  
い、目に見えない問題はなおざりに  
されてしまうのではないか。昨年か  
ら自問自答する毎日だ。

一方で書きたい。また、ペンとメ  
モ帳、カメラを肩に地域を歩き、も  
っと深く取材し、この問題をどう表  
現し地域社会に問うか。書きたいと  
いうより、書かなければならない。  
そんな思いが強くなってきた。

悶々していても仕方ない。今年はず  
外に出て取材し、被災地の目に見え  
ない問題、課題を浮き彫りにしていこ  
うと、この原稿を書きながら決めた。

たけうち・ひろゆき▼石巻ニューゼ開館  
から館長を兼務

■石巻ニューゼ 石巻市中央2-1-8-12  
ホシノボックスピア 絆の駅内  
TEL 0225-9817323  
開館時間10時〜18時 月曜定休

私が会ったあの人

## イスラム圏初の女性首相 ストリートな姿勢貫いたブットさん

林 路郎（読売新聞社）

記者がニューデリーに駐在して南アジア取材していた1995年末、パキスタンのベナジル・ブット首相にインタビュした。来日を控え、イスラマバードの首相官邸で時間を取ってもらった。

大きな窓から首都を一望できる応接室に、首相は現れた。

イスラム圏初の女性首相は公の場では頭をスカーフで覆っていたが、堂々たる体格、鋭い目、野太い声、一挙手一投足は場の空気を変え、取り巻く年配高官らを走らせる。その様子に目を見張った。

オーラと威圧感、途上国の権力者ならではのものだった。

米ハーバード、英オックスフォード両大学卒の学歴は、識字率が3割前後とされたこの国では、特権階級の象徴でもある。「ブット王朝」と呼ばれる名家出身の指導者として、国を率いる使命感も、

並々ならぬものだったに違いない。

討論では他人の発言を遮り、まくしたてる気の強さを見せた。インタビューで、その片りんがのぞいた。当時、世界中が疑っていた核兵器開発に話が及んだ時だ。

「パキスタンは、核心的技術を持つているが、平和目的に限って使ってきた。今後、核兵器製造や核実験、兵器技術輸出などのために使わねばならない日が、決して来ないことを願っている」

核保有を目指す信念にも似た決意を述べたのだと感じた。言葉よりも、その語気からだった。

パキスタンとインドは、47年に英国から分離独立して以来の宿敵同士である。共存していたヒンズー教徒とイスラム教徒を引き裂いた独立の悲劇や、異教者が支配する隣国への敵視を是とする世論が、長引く国境紛争やテロ、軍拡の背景にある。

自国より大きなインドが核を持つなら、パキスタンも後を追うしかない。それが唯一の自衛手段だと、多くの国民が信じていた。

インドの国名を発音したあたりで、首相の声は興奮を帯びた。

「わが国を核拡散の道へ追いやる国がインドであることを認識せねばならない。インドは、南アジアを救うため、自制すべきだ」

核拡散防止条約（NPT）に加盟せず、核兵器開発を進めることを決めたのは、ブット氏の実父であり、首相と大統領を務めた故スルフィカル・アリだった。

父の遺業でもあり、国家事業となった核開発を、首相は日米など友好国の不満を尻目に、北朝鮮にも足を運んで迷わず推進した。



イスラマバードの執務室でインタビューに答えるブット首相（筆者撮影）

シヤリフ政権下で、パキスタンがインドの後を追って核実験を強行し、事実上の核保有国となったのは、約2年半後のことだ。

パキスタンにとつていま、より深刻な脅威は、インドでも核でもなく、イスラム過激主義と、それがもたらすテロや暴力だろう。

公用語のウルドゥー語より英語の方が上手だったブット氏は、台頭するイスラム過激主義の危険に敏感だった。それをストリートに表す戦いが、命取りになった。

過激主義の一掃を公約して政権復帰を図ったブット氏は、2007年12月27日、首都近郊での選挙運動中、何者かの銃弾と自爆テロに襲われ、54歳の生を終えた。

アル・カーイダ系テロ組織や、過激派シンパを抱える軍情報部の関与が取りざたされた。けんか腰で敵に挑み、玉砕する。この人らしい最期だと思った。

（はやし・みちお 論説委員）

次号は国末憲人さん（朝日新聞）にバトンが渡ります。

## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■よさこいパーティー 高知新聞・高知放送共催  
毎年12月に新聞・放送・通信各社などの関係者を招き、高知の郷土料理と酒を楽しむ会を開いている。宮田速雄高知新聞社長、山本邦義高知放送社長ら両社幹部が出席者と懇談した。約850人が参加。(12.5 10階ホール)

■柳沼晃さんを偲ぶ会  
日本工業新聞社の常務取締役編集局長を務めた柳沼晃さん(2013年11月死去、享年79)を偲ぶ会が開かれ、約90人の仲間が集った。産経新聞の熊坂隆光社長、日本工業新聞の縣良二社長はじめ、廣瀬博・東日本高速道路社長、長堀守弘・前明治大学理事長、村田博文・財界研究所社長ら生前に親交のあった多くの友人が冥福を祈った。(12.8 宴会場)

■日本科学技術ジャーナリスト会議・日本医学ジャーナリスト協会合同フォーラム

日本科学技術ジャーナリスト会議の創立20周年を記念して、日本医学ジャーナリスト協会との合同フォーラムを開催した。両団体のジャーナリストがともに関心を持つテーマとして「医療ビッグデータ」を取り上げ、阿部博史氏(NHKディレクター)、今中雄一氏(京大大学院教授)をゲストに招いた。(12.12 宴会場)

■東京写真記者協会年次総会・表彰式  
2014東京写真記者協会賞各賞の表彰式が行われた。グランプリは産経新聞・大山文兄記者撮影の「火山灰の中に生存者」に贈られた。各受賞作は東京写真記者協会のウェブサイトで見ることができ、横浜の日本新聞博物館でも3月29日まで展示している。

また、同協会の事務局長で11月18日に急逝した花井尊氏(元朝日新聞写真部長)を偲ぶ会も行われた。(12.26 宴会場・10階ホール)

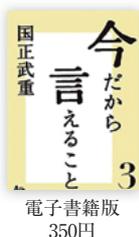
## 会議報告

●第447回企画委員会(12.11 大会議室)  
「2015年予想アンケート」の問題を作成した。出席 会田委員長、倉重、橋本、脇、宮田、軽部、宮内、島田、川戸、杉尾、川村、露木、村田、津山の各委員。

## マイBOOK

■今だから言えること3 歴代総理大臣の姿が語る、日本の光と影

歴代総理の生身の姿に肉薄 電子書籍シリーズ第3弾として配信。朝日新聞政治記者時代の膨大な取材ノートやインタビューを掘り起こし、政権を担った歴代首相の政権運営の根幹を描きました。今回、登場するのは、財界人中山素平、野田佳彦元首相、安倍晋三元首相(2006-07)、土井たか子元社会党委員長、宇野宗佑元首相、森繁久彌(俳優)などの方々です。その時々の政治から現代政治まで、そこで何が起きていたのか、政治家がどのように関わっていたのかを読み知ることで、現代の政治と平和、そして、私たちの暮らしを、もう一度考えるきっかけとなる1冊です。国正 武重(朝日新聞出身)



電子書籍版 350円

## 新しいOB会員

■茅野 臣平 1968年テレビ朝日入社。政治経済部、社会部長、報道制作部長、長野朝日放送取締役、参与など。



テレビが「メカの詰まったタダの箱」にならないよう報道番組の存在感を支えてほしいと思います。

■出口 俊一 1975年産経新聞入社。電子メディア部長、経済産業研究所などを経て2003年退社。現在、デジタルニューディール研究所代表、金沢工業大学客員教授。



還暦を過ぎると、髪が減って悩みが増えた。不惑、あの時も迷っていた。「新しい現実」をどう捉えるか。いま一度、原点に戻りたい。

## 囲碁の会 大軒杯

12月13日(土)に開催した、年末恒例の大軒杯には18人が参加した。2グループに分かれて3局を戦ったところ、A組では田中信義さん(NHK出身)、B組では山路憲夫さん(毎日新聞出身)がそれぞれ3連勝し、2人による決勝戦を行った。田中さんの7子局で始まった対局は、序盤で山路さんの見損じがあったものの大事には至らず、徐々に白石が陣地を広げながら終局。白番の山路さんが5年ぶり4度目の大軒杯を手中にした。田中さんは2年前に続いて2度目の決勝進出だった。(河野聡)

## イスラエルからみた「アラブの春」のいま

日・イスラエル外務次官級定期協議のために来日したイスラエルのベンシトリット外務次官(前駐日大使)が、12月8日、駐日大使館で会見した。

アラブの春には当初から懐疑的だったが、イスラエルを取り巻く状況は厳しさを増した、と言う。ムバラク政権崩壊後、シナイ半島でのイスラム過激派が動き出し、シリア政権の不安定化でヨルダンに難民が100万人以上も流入している。「イスラム国」が台頭しイスラエルを攻撃する可能性がある。日本は北からの動きだけに目を向ければよいが、四六時中、四方を注視しなくては国の存続に関わるイスラエルのことに思いをめぐらしてほしい、と。(石川洋)

■習近平の強権政治で中国はどこへ向かうのか

うごめく巨龍の実像に迫る 隣国・中国の動向を克明に追い続けると、その先にどんな像が浮かび上がるのか。そんな思いで5年前から中国メディアや香港情報などをとらえ、政治、外交、経済、社会と中国の現状分析を続けている。大国だけにニュースは事欠かず、毎月、原稿用紙で40枚を超える。シリーズ2冊目は胡錦濤政権末期から習近平政権スタートの2年間の成果をまとめた。「はじめに」と「おわりに」で最新分析も試みた。「習近平の中国」の先行きはまだ見えない。事実を積み上げる作業をコツコツ続けるしかないと考えている。



ミネルヴァ書房 4860円

濱本 良一(読売新聞出身、国際教養大学教授)

**レストラン** \*価格はすべて税込です

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766

**和食 初春懐石 (1/30まで)**

先付：手持ち昆布、菜の花ほか お椀：雑煮椀  
お造り：鯛薄造り 焼物：銀鱈西京焼き 煮物：  
若竹煮、ふき他 揚物：海老みの揚げ 食事：  
鯉そば 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き  
(5,400円) (板長：大井由光)

**洋食 鹿背肉のソテーコース (2/28まで)**

ズワイ蟹のカクテルとカリフラワーのムース、オリーブ風味のコンソメ 小松菜・春雨入り、鹿背肉のソテー 芳醇な赤ワインソース、トスサラダ、アップルパイ、パン、コーヒー付き (3,780円)。ランチ、ディナー (土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

**福島のお酒 今年もお楽しみください**

和食レストランで福島県の日本酒を提供しています。利き酒セット (1,296円)もどうぞ。

- ① 栄川 特別純米酒 (3,456円、栄川酒造) ② 会津中将獅子おどり辛口本醸造 (2,916円、鶴乃江酒造) ③ 大七 純米生もと (3,456円、大七酒造)

**会員社ホール | イベント | 情報 |**

浜離宮朝日ホール ▶ 下山静香ピアノリサイタル 戯れるメロディ／魂のリズム～スペイン・南米のクラシック音楽 スペインや南米のクラシック音楽を得意とする下山静香が、異国情緒に富む響きを午後の公演で届けます。演奏曲目はフェデリコ・モンポウ：シヨパンの主題による変奏曲、ホアキン・トゥリーナ：幻想舞曲集 (高揚／夢／狂宴) など。

3/18 (水) 13時半開演 (3,500円) ● 問い合わせ：03-3267-9990 ● <http://www.asahi-hall.jp>

日経ホール ▶ カール＝ハインツ・シュッツ フルート・リサイタル ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の首席ソロ・フルート奏者による東京初の本格リサイタルです。ハイドン、ブラームス、プロコフィエフの楽曲を演奏します。

2/4(水)18時半開演 (3,500円) ● 問い合わせ：03-3943-7066 ● <http://www.nikkei-hall.com>

サントリーホール ▶ オルガン プロムナード コンサート 大ホール正面にある「サントリーホールの顔」、楽器の王様と言われるオルガン。お昼休みの30分間、モニカ・メルツォーヴァによるその音色をお楽しみください。

2/12(木)12時15分開演 (入場無料) ● 問い合わせ：0570-55-0017 ● <http://suntory.jp/HALL/>

王子ホール ▶ ミケランジェロ弦楽四重奏団 世界的ピオラ奏者の今井信子が結成した大人のカルテット。2年間にわたってベートーベンの弦楽四重奏曲の全曲演奏に挑みます。今年は全6回公演のうちVol.1～3を上演。

2/24 (火) 26 (木) 19時開演、2/28 (土) 15時開演 (6,500円) ● 問い合わせ：03-3567-9990 ● <http://www.ojihall.jp/>

**クラブの電話 ダイヤルイン**

- 和食レストラン (9階) ..... ☎ 3503-2723
- 洋食レストラン (10階) ..... ☎ 3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ..... ☎ 3503-2724
- 受付 ..... ☎ 3503-2721
- 会員事務 ..... ☎ 3503-2727
- 経 理 ..... ☎ 3503-2728
- クラブ行事への申し込み ..... ☎ 3503-2722
- 会見申し込みアドレス ..... [kaiken@jnpc.or.jp](mailto:kaiken@jnpc.or.jp)

**会員現況**

- 法人会員：136社 ● 基本会員：754人 ● 個人会員：1,383人
- 法人・個人賛助会員：62社・141人 ● 特別賛助会員：96人
- 名誉・功労会員：12人 ● 学生会員：84人 ● 計：198社・2,470人

**新年会員懇親会 1/15午後6時から**

すでにご案内のとおり、新年互礼会員懇親会を1月15日(木)午後6時から10階ホールで開催します。法人賛助会員各社の社長や、特別賛助会員である大使館の大使、昨年クラブで会見したゲストなども招きます。会場では「2014年予想アンケート」の結果発表と2015年の投票も行います。多数の参加をお待ちしています。

**予想アンケート ネットでも 1/23まで**

「2015年予想アンケート」を今月号に同封しています。FAX (03-3503-7271)か郵送で投票してください。会見案内をメール受信されている方はインターネットからの投票が可能です。希望される方はメール登録をお願いします。締め切りは1月23日(金)です。会員懇親会でも投票できます。

**10階ホール 貸出中止のお知らせ**

今夏、10階ホールの天井耐震工事实施のため、下記の期間はホールの貸し出しを中止します。これに伴い、9階宴会場は午後5時までクラブ行専用として使用し、期間中は大会議室・小会議室のみの貸し出しとなります。詳しくは受付(03-3503-2721)までお問い合わせください。

【貸出中止期間】 7月27日(月)～8月25日(火)

**<法人会員代表変更>**

朝日新聞社 渡辺雅隆代表取締役社長(旧・木村伊量)

**<訃報>**

木屋野正勝会員 (読売新聞出身、77歳)が11月22日大動脈解離のため、原田暁会員 (NHK出身、85歳)が12月18日虚血性心筋梗塞のため亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

**■会員名簿の訂正**

12月にお届けした会員名簿に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

河野健一会員 (38ページ)

現職欄：長崎県立大学シーボルト校名誉教授

HP → <http://www.jnpc.or.jp/>

NEW!

**■会見詳録 12月のアップロード**

- シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」③ 加藤典洋・文芸評論家「『戦後』の意味を考え続ける」(11.7)
- 第17回記者研修会 井上恭介・NHK報道局報道番組センターチーフ・プロデューサー「過疎を逆手に逆転の発想」(8.28)

**1月の行事予定 (12/26現在)**

19日	11:00～12:00 10階ホール
記者会見	ワルストロム・国連事務総長特別代表(防災担当)

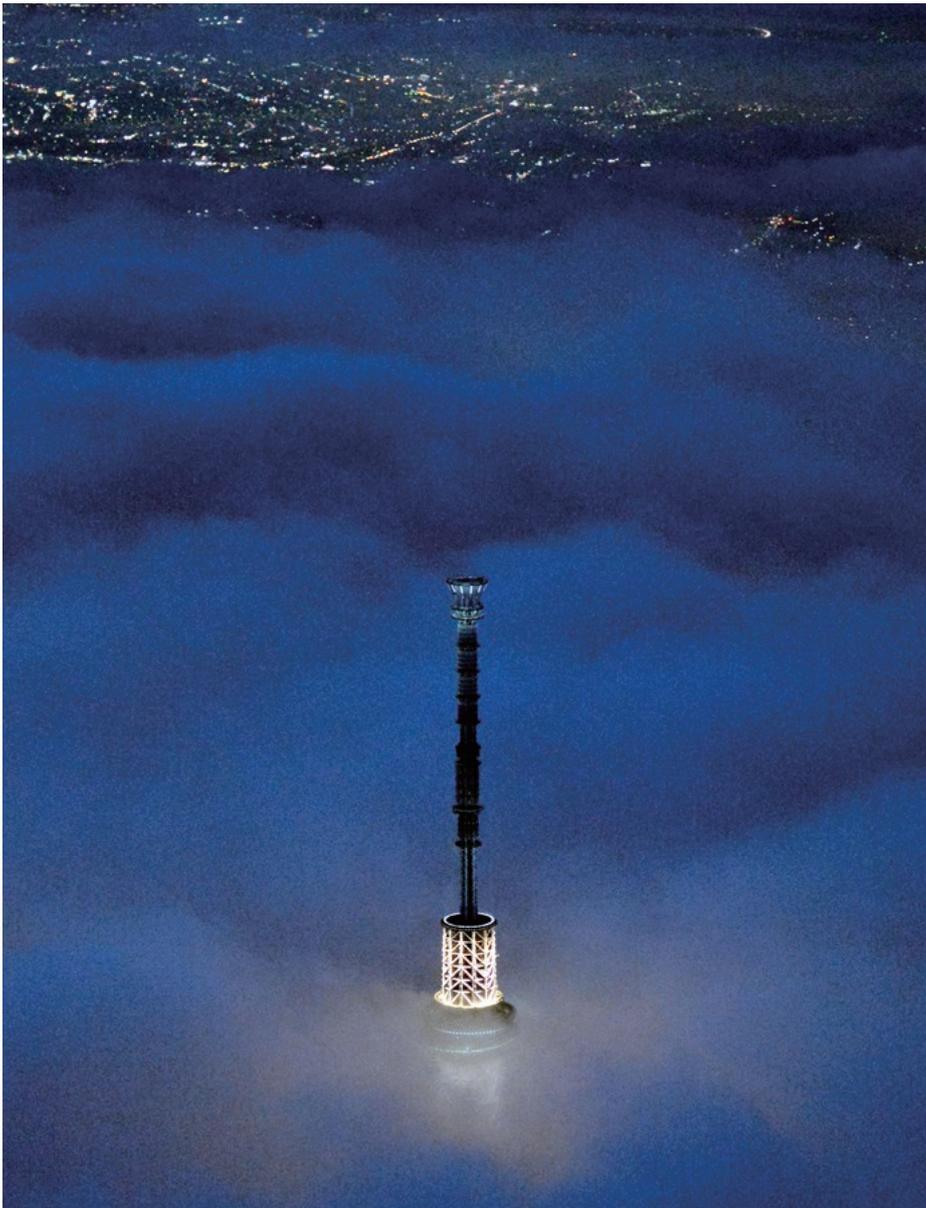
**会報委員会**

- 委員長＝石川 一郎
- 委員＝荒田 茂夫 五十嵐 裕 大寺 廣幸
- 風間 晋 神田 由紀 北村 節子
- 佐塚 正樹 高橋 茂 長澤 孝昭
- 吉野 理佳

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎ 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：七森ななもり 祐也ゆうや  
 (東京新聞写真部)



2014年東京写真記者協会賞・奨励賞受賞  
 雨上がりで低くたれ込めた雲の上に東京スカイツリーが姿をのぞかせた。2014年8月16日、東京新聞ヘリから

## 光と影

「2014年報道写真展」が始まった12月13日、日本橋の会場で多くの人が注目したのは、両陛下や千家典子さんの写真であった。筆者は、一般ニュース部門で奨励賞を受賞した「東京の空に青色LED」のフォトを見ながらメモを取った。近くに誰もいなかった。ペンを走らせていると、急に7、8人が集まってきた。素晴らしい写真が展示されているのかもしれないと思ったのだろう。

青色発光ダイオード(LED)の研究と開発で、3人の日本人研究者がノーベル物理学賞を受賞した。赤崎勇さん、天野浩さん、中村修二さん。赤崎さんは、日本学士院の会員にも選ばれた。LEDを実現する前、高品質な窒化ガリウムの結晶を作成し、結晶に異種元素を添加、青色発光ダイオードを実現した。東京の空に広がった魅力的な光は、空中回廊を通じて、スウェーデンのストックホルムまで届いたのか。

青い光の向こう側には、街の灯火と影のぞく。それは、クラシック音楽を専門とする演奏者が最近よく奏でる、鬼才アストル・ピアソラの「光と影」に重なる。

2015年は、大戦から70年の節目だが、忘れることのできないものに、戦時中の灯火管制がある。新聞紙の両面に墨汁を塗り、10ワットの裸電球にかぶせた夜だ。電球が映し出す夕食は悲しく、わびしい雑炊だった。

(神田 秀一)